高岡市埋蔵文化財調査概報第16冊

高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅱ

—平成2年度，下関地区・南条地区北西部の遺跡分布調査—

1991年3月

高岡市教育委員会

例　　言

1．本書は，富山県高岡市における埋蔵文化財分布調査の概要報告書である。

2．本調査は，平成２年度の国庫補助金の交付を受けて，高岡市教育委員会が実施した。

3．調査対象地は，高岡市内，旧市南部地域の内，下関地区と南条地区北西部である。

4．現地調査は，平成２年10月18日から同年12月20日までの実働22日間である。

5．本調査は，高岡市教育委員会社会教育課文化係文化財保護主事山口辰一が担当し，社会教育課長佐野嘉朗，文化係長河合甚郎が総括した。

6．本書の作成に当たり，上野章氏（小杉町教育委員会）から，御教示を賜った。

7．本書の執筆は山口が担当した。

凡　　例

遺跡，埋蔵文化財包蔵地

▼ 弥生・古墳時代遺物採集地点

▲ 古代遺物採集地点

● 中世遺物採集地点

■ 近世遺物採集地点

調査参加者名簿

現地調査

河合一郎、工幸子，島田英子，高田えみ子，番口順，船木悦子
水外一郎，宮下真知子，吉久恵子

整理

五十里文子，岡村幸枝，沢田優子，菅谷幸恵，高田えみ子
船木悦子，宮下真知子

目　　次

例言
目次

Ⅰ　序　　説 …… 1

Ⅱ　下 関 地 区 …… 3

1．概観…… 3
2．各遺跡の様相…… 5
3．遺物…… 8

Ⅲ　南条地区北西部 …… 9

1．概観…… 9
2．各遺跡の様相……11

Ⅳ　結　　語 ……13

図　版　目　次

図版１　遺跡　下関地区　１．赤祖父羽座間遺跡（南東）
２．出来田南遺跡（南西）
図版２　遺跡　下関地区　１．井口本江遺跡（南東）
２．井口本江遺跡（北西）
図版３　遺跡　南条地区北西部　１．下北島住吉遺跡（北）
２．上北島遺跡（南）
図版４　遺跡　南条地区北西部　１．石塚遺跡（西）
２．石塚遺跡（西）
図版５　遺跡　南条地区北西部　１．石塚江之戸遺跡（西）
２．石塚五俵田遺跡（北西）
図版６　遺跡　南条地区北西部　１．辻遺跡（西）
２．中保Ｃ遺跡（東）

挿　図　目　次

第１図　分布調査事業区分図（1／30万）…… 1
第２図　調査対象地区分図（1／15万）…… 2
第３図　下関地区位置図（1／5万）…… 3
第４図　下関地区遺跡地図（1／1万5千）…… 4
第５図　下関地区土器実測図（1／3）…… 7
第６図　南条地区北西部位置図（1／5万）…… 9
第７図　南条地区北西部遺跡地図（1／1万5千）……10

Ⅰ 序　説

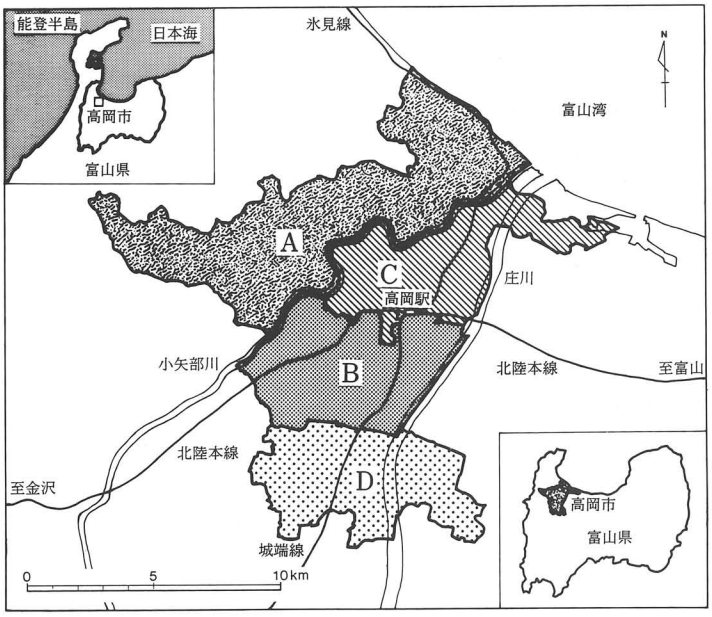
高岡市の位置

高岡市は富山県の北西寄りに位置する。北側は富山湾に臨む。東側は新湊市・大島町・大門町・小杉町と，南側は砺波市・福岡町と接する。また北側は，能登半島の基部東側を占める氷見市である。市域の大部分は，庄川と小矢部川の２大水系によって形成された沖積平野である。これらは，庄川による沖積扇状地部分と，庄川と小矢部川による沖積低地部分とに大別される。砺波平野の北半部と射水平野の西端部に当たる。一方北西部には，西山丘陵と，これに続く二上丘陵が走っている。

西山丘陵埋蔵文化財分布調査

小矢部川左岸一帯の西山・二上地域（西山丘陵・二上丘陵とその周辺の平野部）は，多くの遺跡（埋蔵文化財包蔵地）の所在地として知られていた。昭和50年代に入り道路工事等に伴い，いくつかの遺跡の発掘調査が実施された。当地域に対する各種の開発行為が進むと共に，高岡市は，西山地区での総合開発計画を検討していた。

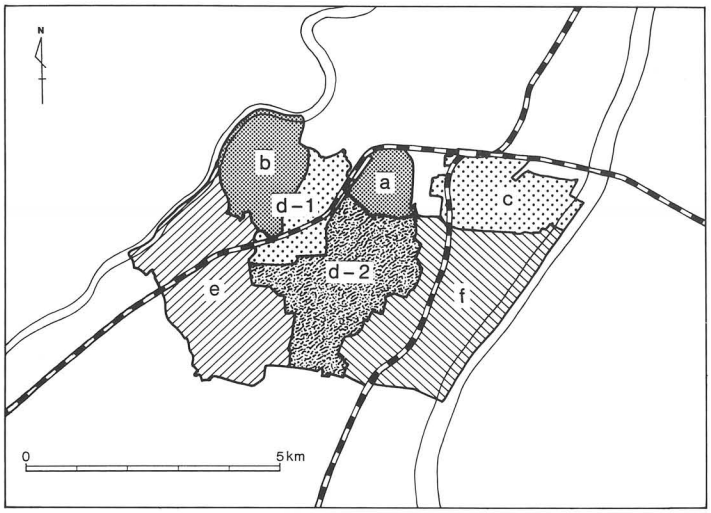
このような状況の中で，西山・二上地域における遺跡の分布状況や内容の掌握が，埋蔵文化財の保護上急務となってきた。以上のことから，高岡市教育委員会では，昭和58年度～昭和62年度の５箇年に亘り，国庫補助を得て「西山丘陵遺跡分布調査事業」を実施するに至った。その成果は各年度ごとに『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報』Ⅰ～Ⅴとして刊行されている。



第１図　分布調査事業区分図

（１/30万）

Ａ．西山丘陵地域
Ｂ．旧市南部地域
Ｃ．旧市北部地域
Ｄ．戸出・中田地域



第２図　調査対象地区分図

（1／15万）

ａ．木津地区
ｂ．東五位地区
ｃ．下関地区
ｄ－１．南条地区北西部
ｄ－２．南条地区南東部
ｅ．千鳥ケ丘地区
ｆ．二塚地区

高岡市埋蔵文化財分布調査

西山・二上地域以外にも，高岡市域に数々の遺跡が存在することは言を俟たない。平野部が主体を占める地域でも，農地転用等数々の開発行為がなされつつあるのが現状である。これに対して，遺跡の分布状態の把握が不十分であり，国庫補助・県費補助を得て西山・二上地域以外の市域における分布調査に着手することになった。

高岡市は面積15,000haを計る。この内約 6,000haは，前述の通り西山丘陵分布調査として，実施済みの地域である。すなわち，残り 9,000haが対象地となった。広い地域であるので，３地域に大別した。市域の南部に当たる旧戸出町・旧中田町を１つの地域，そして残りの地域は昭和30年以前に合併した町・村よりなるので，これをＪＲ高岡駅付近を基準に南北に分け，旧市南部地域，旧市北部地域と称することにした。３地域の中では「旧市南部地域」が．最も遺跡密度が濃いと判断されたので，この地域より開始することにした。

地区割りは，小学校区を基準とし，第２図のように区分した。これらを５つのブロックに分け下記のように５箇年で調査を終えるように配分した。

Ⅰ．平成元年度調査実施地区，ａ；木津地区，ｂ；東五位地区
Ⅱ．平成２年度調査実施地区，ｃ；下関地区，ｄ－１；南条地区北西部
Ⅲ．平成３年度調査予定地区，ｄ－２；南条地区南東部
Ⅳ．平成４年度調査予定地区，ｅ；千鳥ケ丘地区
Ⅴ．平成５年度調査予定地区，ｆ；二塚地区

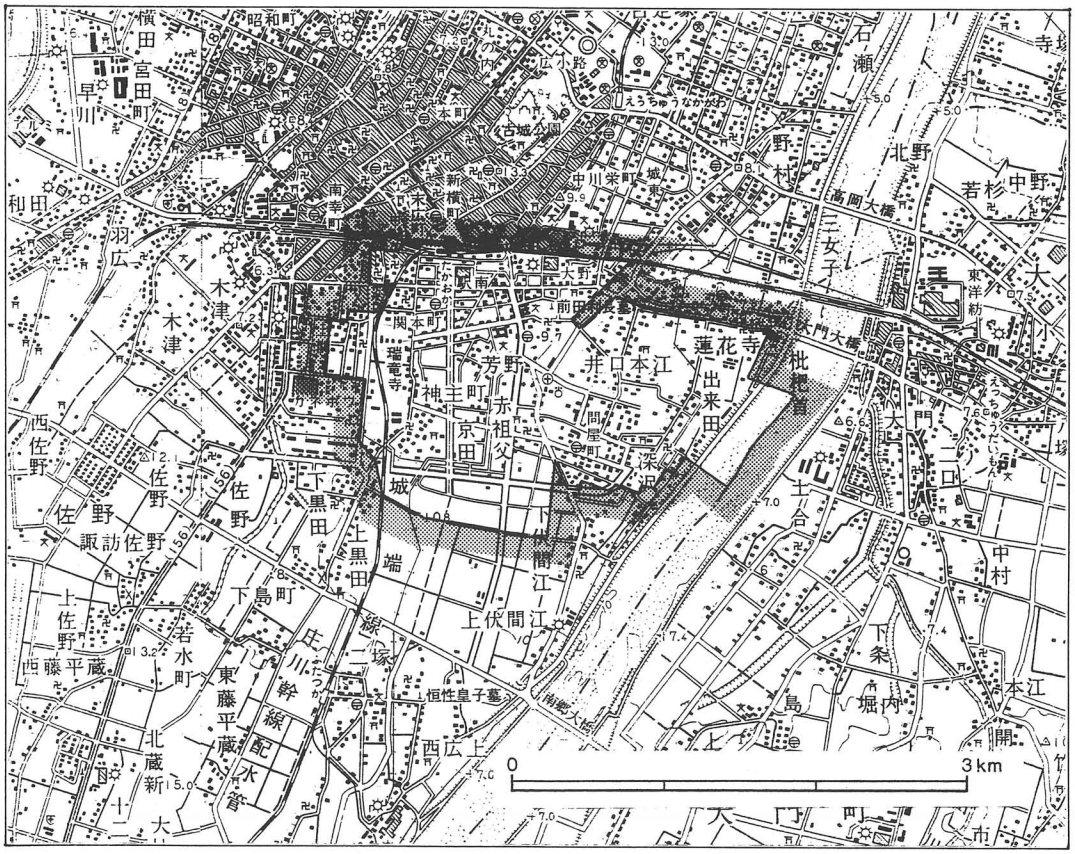
今年度の分布調査

以上のような経緯で，本年度は，下関地区と南条地区北西部の２箇所で分布調査を実施することに至った。

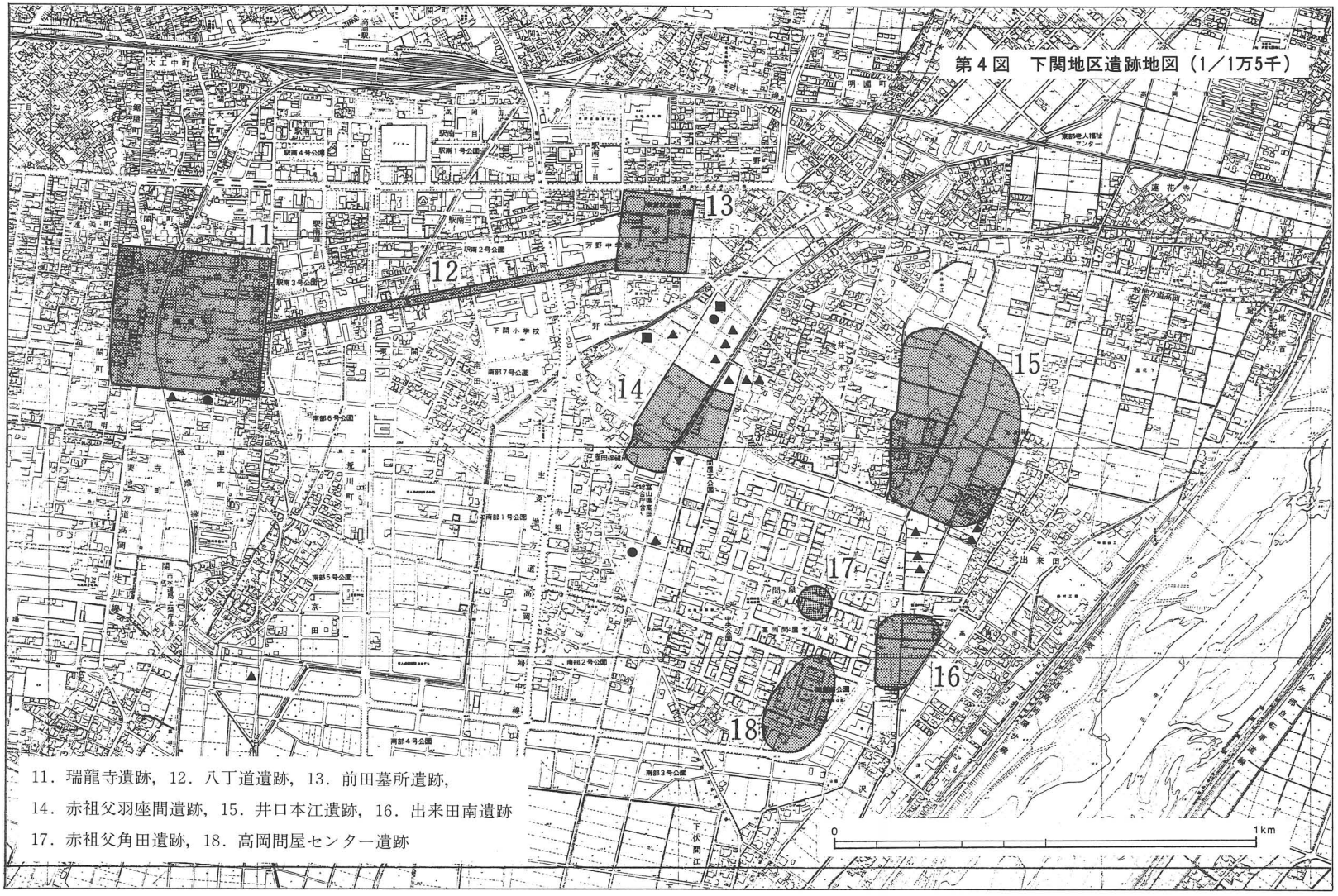
Ⅱ　下関地区

1．概　　観

下関小学校下，約 295haが調査対象地である。範囲は，北側がＪＲ北陸本線乃至，県道高岡・大門線までである。東側は，庄川，即ち大門町との市・町境までである。西側は，ＪＲ城端線付近までで，その東方には千保川が南流している。また南側には下伏間江集落が位置する。当地区は，東部が旧野村村の南端部，西部が旧下関村の南側に属する。この旧村境を地久子川が北東流している。地形的には，東の庄川と西の千保川とに挟まれた沖積低地部分である。北側には高岡台地が位置している。現在宅地化が進み，微細な地形の起伏状態はほとんど観察することができない。なお，当地区の西側は若干の間隙を置いて，平成元年度に調査を実施した木津地区であり，南側は平成５年度に調査を予定している二塚地区である。



第３図　下関地区位置図（１/５万）



第４図　下関地区遺跡地図（1／1万5千）

11．瑞龍寺遺跡，12．八丁道遺跡，13．前田墓所遺跡，
14．赤祖父羽座間遺跡，15．井口本江遺跡，16．出来田南遺跡
17．赤祖父角田遺跡，18．高岡問屋センター遺跡

2．各遺跡の様相

11．瑞龍寺遺跡

高岡山瑞龍寺は，高岡市関本町に所在する曹洞宗の大寺院である。総門・山門・仏殿・法堂から成る曹洞宗寺院の典型的様式を伝える伽藍が，東面して位置している。この現今の瑞龍寺（いわゆる「伽藍瑞龍」)は，加賀３代藩主前田利常が，先代藩主前田利長の菩提寺として建立したものである。正保２年（1645）に起工され，明暦２年（1656）までに，主要な建物が竣工し，寛文年間（1661～1673）あるいは寛文３年（1663）に完成したとされる。この寺院の起源は，慶長18年（1613）に，前田利長が広山恕陽を招いて開いた法円寺（宝円寺）と言われている。翌慶長19年（1614）に利長が死去した際にその法名を取り瑞龍寺（あるいは「瑞龍院」)と改称したとされている。これら前身寺院の旧瑞龍寺を現瑞龍寺付近に想定する考えもあるが，具体的なことは何も分かっていない。現瑞龍寺の創建当時の寺域は３万３千坪余りを計ったものである。２重の堀で囲まれ，内区には主要伽藍を，外区には四つの塔頭を配置するものである。現在も外堀の一部は，用水として名残りを止めている。

瑞龍寺遺跡としての発掘調査は，防火水槽建設に伴う事前調査で昭和63年度に１回実施している。瑞龍寺防火施設事業における防火水槽建設工事中，瓦が多量に出土したので，工事を中断して緊急に試掘調査を行い，引続いて本調査を実施した。総門の南南西側，現在は存在しない七間浄頭（東司）の東側である。調査面積は 150m²である。調査の結果，溝５条と瓦溜り５箇所を検出した。溝の内１条は，上水用木樋埋設のための暗渠である。南方より伏流水を水源として，瑞龍寺へ水を供給していたものと推察している。

瑞龍寺遺跡からの出土遺物，採集遺物で主要なものは言うまでもなく，多量の近世・近代瓦である。また，越中瀬戸等の近世陶磁器類も若干出土している。近世瓦は，燻し瓦と釉薬瓦である。釉薬瓦は全面に旋釉するものではなく，部分的に施釉するものである。燻し瓦と釉薬瓦とも本葺き瓦である。

12．八丁道遺跡

八丁道は，加賀２代藩主前田利長の菩提寺である瑞龍寺と，その廟所である前田利長墓所とを直線で結ぶ参道である。長さが約８町（約870m）あるところから八丁道と呼ばれている。江戸時代の諸史料からは，八丁道の両脇は，松並木となり，石燈籠が立てられていたことが窺われる。石燈籠が一町毎左右に立てられていたと伝える史料もあり，この石燈籠の数については，前田墓所内のものを含めて58基とする記録が多い。

明治８年，樹木が伐採され，それによっていつの間にか道幅も狭くなり，石燈籠も次第に紛失していった。大正２年，古城公園（高岡城）や桜馬場公園の整備と共に，八丁道も整備され，塩釜桜・八重桜の苗木が植えられた。そして道幅は狭いが春になると桜が生い茂る散策道となり，多くの人々に楽しまれる道となった。

このように，八丁道は歴史性もあり由緒ある道筋であるが，所在するＪＲ高岡駅南側地区の環境の変化は著しく，それに相応しい景観整備が望まれてきた。昭和61年度に至り，八丁道を「うるおいのある街の道すじ」として，景観形成することを目標として「八丁道歴史的景観整備事業」が計画され実施に移されることになった。これに伴い旧八丁道の内容確認のため，昭和61～63年度の３箇年に亘り，発掘調査を実施した。調査の結果，八丁道の変遷を以下のように推断するに至った。

第Ⅰ期; 江戸時代前期，黒色粘質土層の上に灰黒色粘質土等を盛って造成。

第ⅡＡ期；江戸時代末期から明治時代，北側へ拡幅，灰色砂質土等を盛って造成。

第ⅡＢ期；明治時代末期から大正時代初期，道路の両側を石垣で改修。

第Ⅲ期；昭和時代＝戦後，砂礫土を盛って造成。

上記の内，第Ⅰ期八丁道は７～８ｍ程度の参道であったと考えられ，第ⅡＢ期八丁道は11ｍ幅の参道であったことが判明している。

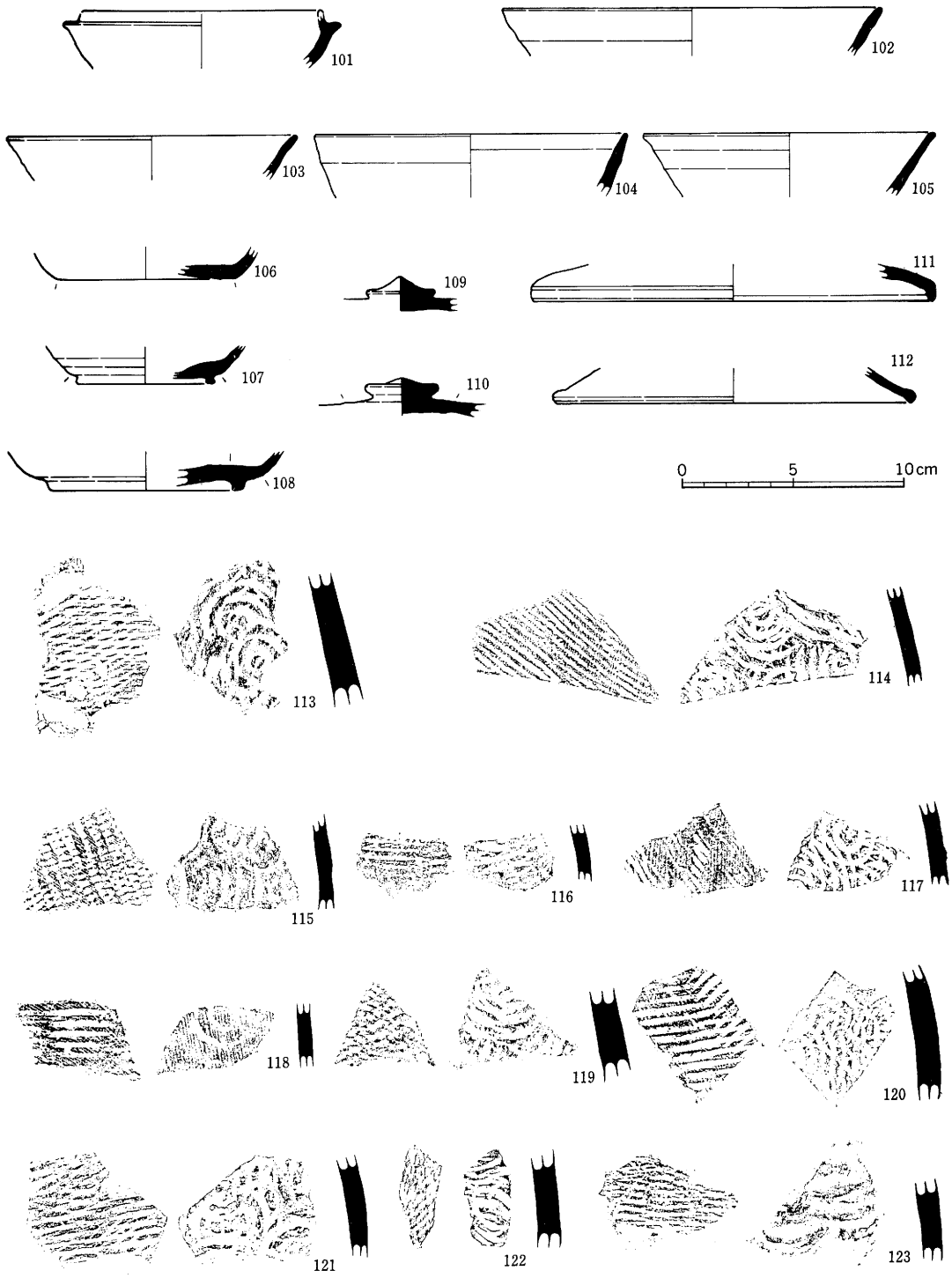
13．前田墓所遺跡

慶長19年（1614）加賀２代藩主前田利長は死去し，遺骸は高岡城の南約 1.2㎞の地で火葬に付された。正保３年（1646年）加賀３代藩主前田利常は，この地に利長の廟（前田墓所）を造営した。前田墓所は，現在県指定史跡になっている。基壇（墓所）は濠で囲まれている。加賀の戸室石で３重をなし，下段は一辺 14.45ｍを計る。その上に花崗岩製の墓標（墓塔）が立つ，高さは11.75ｍである。墓域は５万坪あったと伝えられている。江戸時代の絵図からは，２重の堀で囲まれた墓所の様相が窺われる。明治維新後荒廃し，明治42年に至り，第16代前田利為は敷地の拡張を出願し，大修復を施した。その時の墓地取拡願によると，墓域は約１万坪あったとされ，旧形に復元して 9,560坪の墓地としたとされる。また図面から２重の堀で囲まれた墓所であることもわかる。第４図で遺跡としたのは，ほぼこの範囲の想定墓域である。

前田墓所遺跡の発掘調査は，下関雨水幹線建設に伴い．昭和63年度と平成元年度とに実施した。その成果は次の通りである。墓所への西側入口部（八丁道側の入口部）で礎石を伴う掘り方状の穴が検出された。門柱等の据え方と考えた。墓所南側の石垣については，釉薬瓦の出土より，近代に構築されたものと推定した。また一部ではあるが，墓所造成に伴うものと推定した土層も観察された。

14．赤祖父羽座間遺跡

沖積低地部に位置している。富山県高岡総合庁舎の前面（北側）一帯である。遺跡の東側部分を地久子川が北東方に流れている。標高約９ｍを計る。現況は水田を主とするものである。遺跡の範囲は南北 260ｍ×東西 220ｍである。総合庁舎敷地と道路を隔てて北接する地区の試掘調査を昭和61年度に実施した。この結果，竪穴住居址？掘り方（掘立柱建物址？），土坑，溝等の遺構が検出され，古墳時代から奈良時代の土師器・須恵器等の遺物が出土した。遺跡の中心部と思える内容であった。当遺跡の南側への拡がりは，総合庁舎があるため不明である。平成２年度に



第5図　下関地区土器実測図（1/3）

須恵器；101～123

は総合庁舎の東側水田の試掘調査を実施した。この結果，ここが遺跡の範囲外であることを確認するに至った。過去の出土遺物，試掘調査や踏査による採集遺物等より，遺跡の時代は古墳時代から奈良時代に至るものと言える。ただし，平安時代や中世のものも少量だが出土しており，この時代まで一部続く可能性がある。

15．井口本江遺跡

沖積低地部に位置している。井口本江集落の東側一帯である。標高約９～10ｍを計る。現況は水田が主となっている。遺跡の範囲は南北450ｍ×東西300ｍである。集落の東端部に「慈眼庵」がある。この付近は畑地となり，周囲と比べてやや高くなっている。遺物の散布状況も含めて，このあたりに遺跡の中心を求めたい。土師器，須恵器，珠洲が採集されている。

16．出来田南遺跡

沖積低地部に位置している。高岡問屋センターの東端部である。標高約8.5ｍを計る。現況は水田である。遺跡の範囲は南北170ｍ×東西130ｍである。遺跡範囲の北側には諏訪神社がある。東側は庄川へ続く低地部となり，比高差を有する。西側は問屋センターとなり，遺跡の西側への拡がりは不明である。土師器，須恵器，珠洲が採集されている。

17．赤祖父角田遺跡

沖積低地部に位置している。現在高岡問屋センターとなっている所で，旧地番は，赤祖父字角田435番地である。標高約10ｍを計る。遺跡の範囲は100ｍ四方ぐらいとされている。工事中に弥生時代の壺が完形で出土している。

18．高岡問屋センター遺跡

沖積低地部に位置している。高岡問屋センター内の南東部である。標高約８ｍを計る。昭和45年頃，問屋センター用地の整地工事中に発見された。遺跡の範囲は明確ではない。縄文土器及び土師器・須恵器が出土している。

３．遺　　物

第５図として，須恵器を図示した。101～102が赤祖父羽座間遺跡から出土している以外，井口本江遺跡と出来田南遺跡から出土している。

杯Ｈ　蓋受けを持つ杯で101である。

杯Ａ・Ｂ　杯類の口縁部片で102～105である。

杯Ａ　高台の付かない杯で106である。底部はヘラ切りとなっている。

杯Ｂ　高台付の杯で107～108である。

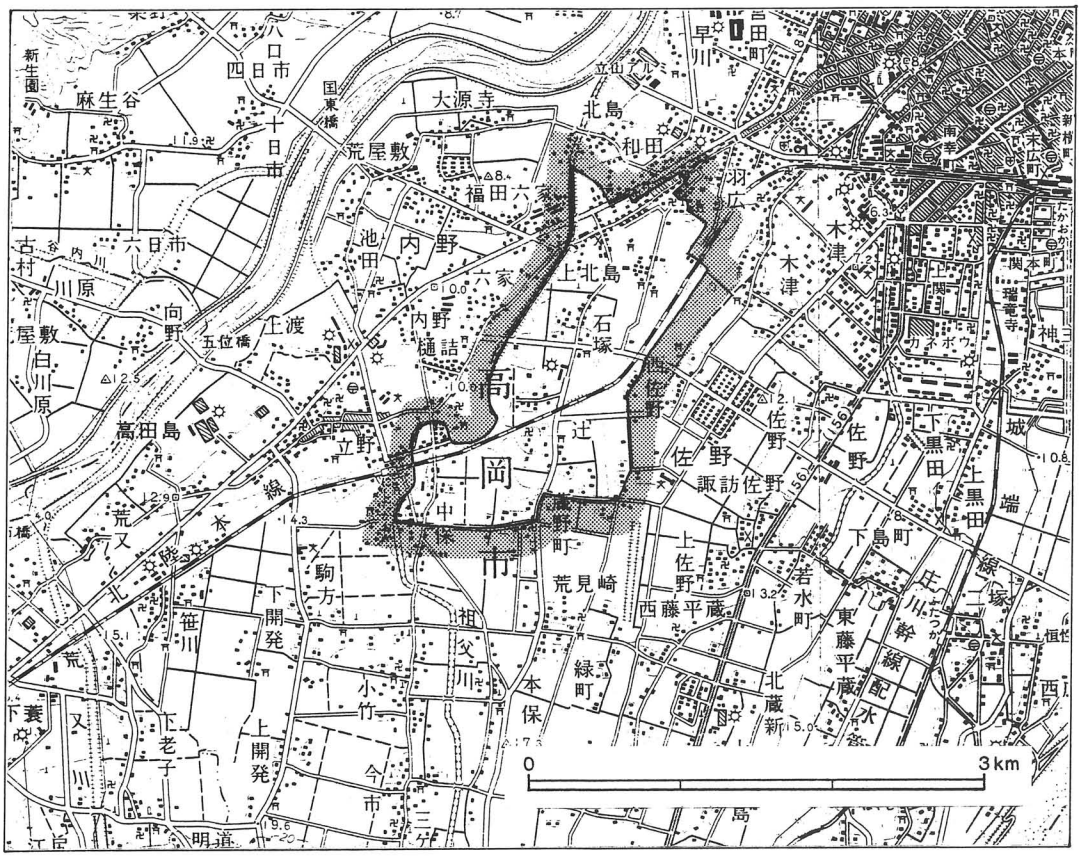
蓋　杯類の蓋で109～112である。宝珠形のつまみ片と口縁部片である。

甕　甕の胴部片で113～123である。内面があて具の青海波文，外面が叩き目である。

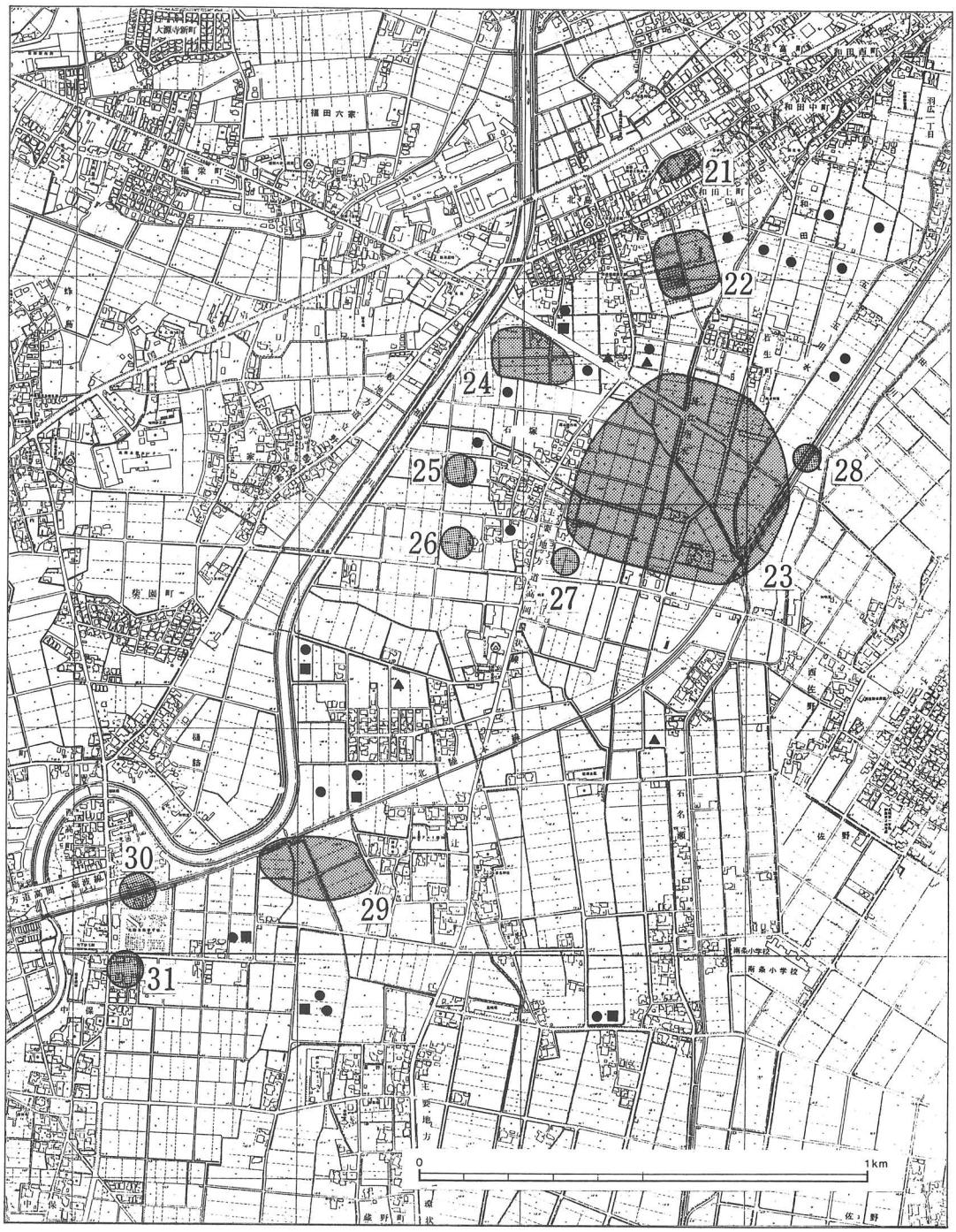
Ⅲ　南条地区北西部

1．概　　観

南条小学校下の北西部，約247haが調査対象地である。南条小学校下は約789haを占め，残りの南東部約542haは，平成３年度調査予定である。範囲は，北側が国道８号線付近まで，東側・西側はそれぞれ，和田川・祖父川まで，南側は蔵野町集落までである。対象地の南東部にはＪＲ北陸本線が走る。当地区の大部分は，旧福田村や旧福田小学校下に属する。旧福田村の大字蔵野町や荒見崎は調査区分の関係上，平成３年度調査の南条地区南東部の所属とした。地形的には，沖積低地部分である。かって見られた地形の起伏状態は，耕地整理等で平板化しているが，庄川が形成した沖積扇状地の前面部分とも言うべき所であり，小河川の開析谷や谷地形が各所で認められ，平坦な平野部ではない。



第６図　南条地区北西部位置図（１/５万）



第７図　南条地区北西部遺跡地図（１/１万５千）

21．下北島住吉遺跡，22．上北島遺跡，23．石塚遺跡，24．石塚江之戸遺跡
25．石塚五俵田遺跡，26．石塚蜻保遺跡，27．石塚屋敷田遺跡，28．石名瀬Ｂ遺跡
29．辻遺跡，30．中保Ｃ遺跡，31．中保Ａ遺跡

2．各遺跡の様相

21．下北島住吉遺跡

国道８号線が走る低地部に臨む台地の突端に位置している。標高約11ｍを計る。現況は畑地である。遺跡の範囲は南北40ｍ×東西90ｍを計る。遺跡の南側には，旧北陸道である一般地方道立野・鴨島線が走る。この脇に発達した上北島や和田の街村の裏手に当たる。縄文晩期の土器，弥生土器ないし古墳時代の土師器，須恵器が採集されている。

22．上北島遺跡

沖積低地部の平坦地に位置している。標高約11ｍを計る。現況は水田や畑地である。遺跡の範囲は南北140ｍ×東西130ｍである。上北島の街村の南側，神明社を中心に遺物が散布している。東側には長江用水が流れ，西側は主要地方道高岡環状線が走る。遺物は，土師器，須恵器，珠洲，近世陶磁器である。平安時代から中世頃を中心とする遺跡と推定されるが，遺物の量は少ない。

23．石塚遺跡

沖積低地部に位置している。大きくみれば，東側の和田川と西側の祖父川に挾まれた微高地帯に位置していると言える。遺跡の東端部をＪＲ北陸本線が走っている。標高約11～12ｍを計る。現況は水田である。遺跡の範囲は南北440ｍ×東西470ｍである。北側は若生町・荊波神社付近，東側は和田川の低地部，南側は県道中田・立野線付近，西側は主要地方道高岡環状線（旧県道戸出・高岡線）付近までである。圃場整備等がすでに実施され，現在は平坦な水田地帯となっているが，かっては微高地が半島状に北方へ突き出ていたとされる。

当遺跡は，昭和42年にその存在が確認され，昭和43年，高岡工芸高校地歴クラブＯＢ会により発掘調査が実施された。現在遺跡の中央部と推定している地点である。昭和55年以降は，高岡市教育委員会により，数回に亘り発掘調査が実施されてきた。昭和56・57年度には，圃場整備に伴い，遺跡の東半部を広域的に調査した。昭和55・56年度には，宅地造成に伴う調査がある。一方，遺跡推定北部域を横断する形で，都市計画道路－下伏間江・福田線が築造されることになり，昭和60～62年度に調査を実施した。このような発掘調査の結果や遺物の散布状況等より，遺跡範囲を設定した。

昭和42年以来，当遺跡は弥生時代中期の県下を代表する遺跡として著名なものであり，規模や存続期間等より，周囲の小集落に対する母村としての機能を果たした集落跡との評価を得てきた。その後，古墳時代前期や鎌倉・室町時代の遺構の検出。弥生時代前期末や平安時代の土器の確認や出土等より，時代幅の広い集落跡であると認識されるに至っている。祖父川と和田川に挾まれた微高地に立地し，弥生時代前期末以来，室町時代に至る当地の拠点的な大規模集落と言える。

24．石塚江之戸遺跡

祖父川やこれに向う開析谷に臨む台地上に位置している。標高約11ｍを計る。現況は水田である。遺跡の範囲は南北100ｍ×東西180ｍである。上北島と石塚の集落の中間に位置する。遺跡の

北側を都市計画道路－下伏間江・福田線が走り，この道路に関わる発掘調査では，遺構が検出されず，出土遺物も極めて少なかったので，遺跡の北限とした。以前，縄文時代の土器や土師器が採集されているが，今回の分布調査で採集したものは，ほとんど珠洲である。

25．石塚五俵田遺跡

祖父川に面する台地上に位置している。標高約11ｍを計る。現況は水田である。遺跡の範囲は明確ではない。石塚集落の西側に位置する。以前，工事に伴い縄文時代後期の土器が出土し採集されている。今回の分布調査では珠洲が採集された。

26．石塚蜻保遺跡

祖父川に面する台地上に位置している。標高約11ｍを計る。現況は水田である。遺跡の範囲は明確ではない。石塚集落の南西側に位置する。以前，縄文時代晩期の土器が採集されている。

27．石塚屋敷田遺跡

沖積低地部の微高地上に位置している。標高約11ｍを計る。現況は水田である。縄文時代晩期の土器が出土した地点であり，遺跡の拡がり等は不明である。石塚遺跡の南西側に接するように位置するので，石塚遺跡の一部とした方がよいかもしれない。

28．石名瀬Ｂ遺跡

和田川に面する台地上に位置している。標高約11ｍを計る。現況は水田である。昭和39年，北陸本線複線化工事に伴い確認されたもので，遺跡の範囲は不明確である。立地や遺物の散布状況からは，狭い範囲と推定される。時代的には，弥生時代から古墳時代頃である。

29．辻遺跡

祖父川に南方より流れ込む小河川を挟む地区に位置している。標高約10～12ｍを計る。現況は水田である。遺跡の範囲は南北140ｍ×東西120ｍである。遺跡の北側をＪＲ北陸本線が走り，その北側は祖父川の低地部に臨んでいる。辻集落の西側一帯である。以前，河床及び台地端部より縄文時代晩期の土器が出土し採集されている。小河川の東側の台地は，その東方が低地部となっているので，北へ向って半島状に突き出た形になっている。今回の分布調査により，この台地上から，土師器，須恵器，珠洲が採集されている。

30．中保Ｃ遺跡

祖父川近くの微高地に位置している。ＪＲ北陸本線を挟んで，北側の中保市営住宅から南側の北陸自動車学校へかけての地区である。標高約10～12ｍを計る。遺跡の範囲は不明確である。以前に弥生土器が出土している。平成元年度に実施した北陸本線に南接する地区の試掘調査では，遺構は検出されなかったが，古墳時代～奈良時代の土師器・須恵器が数点出土している。

31．中保Ａ遺跡

沖積低地部の微高地上に位置している。北陸自動車学校の南方一帯である。標高約13～14ｍを計る。現状は宅地及び水田である。遺跡の範囲・実態等は不明である。以前に弥生土器が出土し，採集されている。

Ⅳ 結　語

下関地区

下関地区では，２つのタイプの遺跡の存在が指摘できる。近世都市高岡に関するものと，弥生・古墳時代を中心とした農耕地集落タイプのものである。

瑞龍寺遺跡・八丁道遺跡・前田墓所遺跡は三位一体のものである。すなわち，加賀２代藩主前田利長の菩提寺と墓地，そしてこれを結ぶ参道である。また前田墓所の南側に位置する守家の繁久寺もこれに関連するものである。これらについては，高岡城に対して，瑞龍寺と前田墓所を防衛拠点とし，八丁道がこれを結んで，南側の大防壁となっていたとの解釈がよく知られている。３者とも遺跡と称しているが，近世前期以来，大きな改変も受けず，その機能を現在まで存続させているものである。旧体を探る意味と考古学的調査の必要を訴える点でも，埋蔵文化財保護上このような呼称は必要であると考えている。構造的には，この３者で完結している面もあるが，大きくは近世都市遺跡（「近世高岡遺跡」や「高岡町遺跡」と称することが可能と思われる遺跡）の一部を構成するものである。

次に近世都市関係以外のものである。すなわち上記以外の，赤祖父羽座間遺跡，井口本江遺跡，出来田南遺跡・赤祖父角田遺跡・高岡問屋センター遺跡である。これらの遺跡の立地する所は，地形的に沖積地でも，扇状地より下位の低地部に属する。赤祖父羽座間遺跡の東側を地久子川が北東流している。この遺跡以外の４遺跡は，地久子川の東側に位置しており，一つのまとまりを持った遺跡と推定している。従来知られていた，赤祖父角田遺跡と高岡問屋センター遺跡の二つに，今回，井口本江遺跡と出来田南遺跡を加えて４遺跡とした。前者は，その範囲が明確ではなく，現在問屋センターのためにこれ以上の追及は不可能である。そして後者の遺跡は，その問屋センターに接しており，本来，全体が一つの大規模遺跡ないし遺跡地帯であった可能性がある。なお，遺跡の時期としては，弥生時代以来近代に至るまで存続する遺跡のタイプの一つと推定しておきたい。

南条地区北西部

南条地区北西部は，扇状地前面に位置し，祖父川と和田川に挟まれた微高地上に立地している遺跡地帯である。当地区は，昭和40年代に数々の成果を上げた，小島俊彰氏の率いる「オジャラグループ」（高岡工芸高等学校地理･歴史クラブＯＢ会）の主要なフィールドの一つである。機関紙『オジャラ』等により，石塚遺跡等が世の中に紹介され，当時，県内において，遺跡の解明が最も進んだ地区の一つであった。今回の分布調査は，この成果を基盤として実施したものである。

当地区の遺跡は，縄文時代後・晩期に始まる。縄文時代後期の土器は石塚五俵田遺跡から，縄文時代晩期の土器は下北島住吉・石塚江之戸遺跡・石塚蜻保遺跡・石塚屋敷田遺跡・辻遺跡から，

出土している。また，弥生時代から開始する遺跡としては，石塚遺跡・石名瀬Ｂ遺跡・中保Ｃ遺跡・中保Ａ遺跡があり，いずれも弥生時代の土器が出土している。残りの上北島遺跡が平安時代に始まるものと推定されている以外，総じて縄文時代晩期～弥生時代中期にはじまるものと言える。その後の各遺跡の動向については，発掘調査の成果や，土師器・須恵器・珠洲等の散布状況から推察するに，個別的・部分的にみた場合，一旦途切れる時期があっても，当遺跡地帯の総体的な内容として，近代まで存在する遺跡と言える。農耕地に適した所として人々が早々く進出して以来，農耕を主体とする生業を基盤に，長期間存続した集落跡と理解している。

参考文献

高岡市役所　1909　『高岡史料』（名著出版復刻版1972を参照）
〈「真龍院君御道の記」，「瑞龍閣記」，「高岡町圖之辨」他〉

青木北海　1932　『越中地誌』　中田書店（江戸時代後期に収録，復刻版『越中寳鑑』1973等を参照）

森田柿園　1951・1952　『越中志徴』　富山新聞社（明治時代に編纂，復刻版1973を参照）

和田一郎　1959～1969　『高岡市史』（高岡市史編纂委員会）　青林書院新社

上坂成次　1967　「高岡市辻遺跡」『オジャラ』第１号　富山県立高岡工芸高等学校地理歴史クラブＯ・Ｂ会

上坂成次　1967　「速報！高岡市石塚弥生遺跡の発見」『オジャラ』第１号 富山県立高岡工芸高等学校地理歴史クラブＯ・Ｂ会

上坂成次・上野章　1967　「高岡市石塚遺跡発掘調査概報」『オジャラ』第３号　富山県立高岡工芸高等学校地理歴史クラブＯ・Ｂ会

京田良志　1979　「高岡山瑞龍寺の草創」『日本海域の歴史と文化』日本海史編纂委員会　文献出版

四ツ谷道昭他（瑞龍寺国宝保存会・高岡市立博物館・富山新聞社）　1981　『高岡山瑞龍寺』瑞龍寺刊行会

豊田文一他　1988　『南星町史』　南星町自治会

1．赤祖父羽座間遺跡（南東）

2．出来田南遺跡（南西）

1．井口本江遺跡（南東）

2．井口本江遺跡（北西）

1．下北島住吉遺跡（北）

2．上北島遺跡（南）

1．石塚遺跡（西）

2．石塚遺跡（西）

1．石塚江之戸遺跡（西）

2．石塚五俵田遺跡（北西）

図版六　遺跡　南条地区北西部

1．辻遺跡（西）

2．中保Ｃ遺跡（東）

高岡市埋蔵文化財調査概報第16冊

高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅱ

1991年3月31日

発行所　高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路7－50

印刷所　小間印刷株式会社
富山県高岡市利屋町3